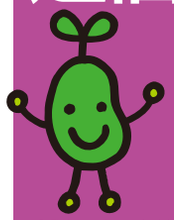
ビーンズ通信 vol.103



●発行日／2021年（令和3年）3月10日
●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL http://www.beans-fukushima.or.jp/
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

対談 震災から10年を経て。

東日本大震災から今年で10年。それぞれの10年があったと思います。
福島県は地震・津波に加え原子力災害も発生し、誰もがこれからどうしたらいいか分からない中で必死に生きていたのではないかと思います。
私たちは福島県から委託を受け、2012年3月から復興支援窓口となる「ふくしま子ども支援センター」を運営し被災した子どもの心のケアに関わり、福島県内及び県外へ避難している被災児童、保護者等への専門的支援が継続して行えるよう各種支援事業に取り組んでまいりました。
そうした取り組みのひとつである県内外へ避難せざるを得なかった子育て世帯への支援では、地域の皆さまと共に力を合わせてこの10年を歩んできました。
今回は、その取り組みに焦点を当てて、理事長の若月とふくしま子ども支援センターの事業長の三浦の対談から、当時の様子とこれから目指したいことをお伝えいたします。

迷いながら選択してきた10年

若月●震災から10年、今何を感じている？

三浦●目の前にある課題に一生懸命で、気が付けば10年という感じです。あの時、放射線の影響が科学的に立証されていなくて、甲状腺の病気になる心配や、何か病気になってしまう不安、何も分からないで外に出してしまった後悔、たくさんあったと思います。

若月●これで大丈夫っていう保証がないから、不安を抱えて日常を生きてきたね。

三浦●ママたちは、常に重いリュックを背負いながら生きている感じでした。

若月●親御さんは、「本当にこの選択で良かったのかな」ってずっと思うよね。

三浦●今年の2月にNHKとコラボして手紙を書く企画があったんですが、「迷いながら走り続けた10年でした」って書いているママがいて、何がよくて、何が悪いのか、分からない状況で精一杯に生きてきたなぁって思います。

ままカフェは、気持ちを出せる場所

三浦●私自身、秋田県横手市に避難してて、帰ることは決めていましたが、除染や食べ物のこと、子どもの学校での活動など心配な気持ちがありました。横手市では、避難している人向けのサロンが毎週金曜日にあって、私のように帰ることは決めたけど不安があっても気持ちを出せるカフェが福島にもあるといいな～って思ったんです。

若月●三浦さんもサロンに関わっていたの？

三浦●最初は私も相談員さんに訪問してもらって、話を聞いてもらう側だったんです。相談員の方は福島から避難されてて、共通点があるからか、出しづらい気持ちを出せたんです。緊張の糸がフッと解けるような。その後、私も相談員を務めるようになりサロン運営などに関わっていました。

対談の続きは4ページへ ↘

●若月ちよ
NPO法人ビーンズふくしま理事長。現在、福島県ひきこもり支援センター（主任ひきこもり支援コーディネーターも）兼務。ビーンズふくしま創立当時、不登校の親として関わってから、早21年。

●三浦恵美里
福島県福島市生まれ　保育士
2011年から2年間秋田県横手市に避難
2013年から「NPO法人ビーンズふくしま」で働く。
同NPOのふくしま子ども支援センター事業長。

若月●福島の人には話せた体験があったから、カフェを提供したい気持ちにつながったんだね。

三浦●ままカフェでは、困りごとはありますか？じゃなくて、共に時間を過ごすことを大切にしています。そうして話す中で、ぽろぽろ出てくるんです。それをしっかりとキャッチする。「頑張ってきたよね、わたしたち」って認め合うように。

若月●ビーンズが大切にしていることだね。

三浦●安心して過ごせる場をママたちが見つけられると、仕事をするようになったり、学校の役員を引き受けたり、どんどん変化していくんです。

若月●まさに安心できると、本来の力が出るってことね。そういう姿を見ていると子どもも変化するよね。

これからの10年は、みんなで子育てを支える地域づくり

三浦●なんでもネットで調べられる時代だから、つながりがなくても子育てができてしまう。ままカフェが始まったきっかけは震災でしたが、もしかすると震災関係なく、孤立しているママたちが多いように思います。

若月●そういうことも見えてきたんだね。私も仕事を辞めた時、つながりがなくなって孤立感を持ったなぁ。気持ちが吐き出せる場所は大切だよね。

三浦●地域によっては社会資源が少ない状況もあって、ままカフェがどこの地域でも行われるようにしていきたい。

若月●地域の子育てを支える拠点になっていけるといいね。横つながりができると親も安心できると思う。

三浦●地域みんなでつくってきたままカフェだから、これからもどんどん地域の人に入ってもらってつくっていきたいです。

お話をしながらくるみぼたんを作っています

ママ達がお話をしている間遊んで待ってます

ご寄付・法人会員募集のお願い

日頃より、私たちの活動にご理解をいただき感謝申し上げます。コロナ禍でたくさんの制限がある中でしたが、皆さまの温かいご支援・ご協力のおかげで本年度も活動することができました。

ビーンズふくしまは、1人1人が本来の力を発揮できるように寄り添い、居場所やサポートできる仕組みを継続してつくっていきたいと思っています。これからも充実した支援を届けるために、ご寄付のご協力をお願い申し上げます。また、私たちの活動を支えてくださる会員の募集も行っております。子ども・若者支援に関心のある方がいらっしゃったら、ぜひ声を掛けていただけないでしょうか。

子どもたち、若者たちへの支援の輪を広げ、支援が1人でも多く届くよう、皆さまのお力をお貸しください。よろしくお願いします。

【ご寄付の方法】

銀行振込み
東邦銀行　本店営業部　普通口座 3692401
口座名義：特定非営利活動法人ビーンズふくしま　理事　若月ちよ

郵便局振込み
口座番号：02240-3-38521
加入者名：NPO 法人ビーンズふくしま

会員募集
正 会 員：年会費　1口3000円　2口から
法人総会における評決権、ビーンズ通信の発送
賛助会員：年会費　1口3000円
ビーンズ通信の発送
※なお、詳細は事務局にお問い合わせください。☎024-563-6255

●ビーンズふくしまのホームページ　こちらへアクセス ⟶ http://www.beans-fukushima.or.jp/

『安心・安全な居場所』から『多様な若者と創る社会』の実現へ

コロナ禍における10代の声

2018年から、高校生世代のサードプレイスとして『すきまcafe』を開催しています。ここでは「皆とこんなことをやってみたい」「こういうことに関心がある」といった、高校生から生まれる声をもとに、彼らと共に場づくりを行っています。この3年間で利用者は延べ500名を超えました。

そのような中、2020年2月の緊急事態宣言を受け、同年4月からオンラインでの開催を続けていました。当時はzoomで交流をしたりチャットをしたりと、居場所の文化を止めないよう試行錯誤の日々が続きました。しかし、オンライン上の場では「学校に行けない」「行事がなくなった」「遊びに行きたい」といった彼らの願いの全てが満たされるわけではありません。そこには、全国一斉の休校措置、学ぶ機会・遊ぶ機会の制限といった周囲の声に翻弄されながら生きる高校生の姿がありました。

コロナ禍において、改めて子ども若者の声が社会に届いていない現実が見えてきました。彼らが生きやすい社会になるためには、彼ら自身が「何に困り、何を願って、どうしたら自分も生きやすい社会になるのか」といった声がこの社会に反映されなければなりません。しかし、私たち1つの組織の力だけでは、彼らの声の全てを社会に届けることは難しいです。

多様性が保障される社会を創るために

私たちが加盟しているネットワーク組織の1つに『こおりやま子ども若者ネット』という団体があり、2020年10月から同ネットワークと共にこの『すきまcafe』を運営しています。子ども若者を支援や育む対象としてではなく、社会を創る仲間として協同することを理念とし、月に1度、子ども若者の多様性・自己実現・参加を保障するための議論を重ねています。

これまでは、私たちが「子ども若者の声」を届けることに力を注いできました。しかし、ネットワーク内で得た結論は、彼ら自身も社会に声を届けることができるということです。今はまだこの郡山地域にそのような機会がほとんどないのが現状です。だからこそ、すきまcafe通じて高校生自身の願いが醸成され、ネットワークを通して醸成された願いが彼ら自身から社会に発信していける、そのような「声の発見と社会化」を目指しています。

2021年5月からは、子ども若者が「私たちの住みやすい街」を考える『こおりやま若者会議』が同ネットワーク主催で始まります。ビーンズが生まれて21年。私たちは決して1つでも1人でもありません。同じ思いを持った仲間とともに、誰もが生きやすい社会を創ることをこれからも続けていきます。

すきまcafeの様子

ミーティングの様子（すきまカフェ）

新型コロナウィルス感染症 COVID-19 大人の不安と子どもの思い

2020年冬。

この時期を境に新たなルールが私たちの生活を制限し始め、世界中で見えない不安との戦いが始まりました。

家庭訪問型で子どもの支援をしている私たちは、訪問ができなくなり子どもたちに会えない日々が続きました。

生活困窮世帯ではネット環境の整備やアルコール消毒、マスクの購入等、経済的な負担が一気に増え更なる家計の逼迫を生みました。加えて休校措置により、子どもたちが学校給食を食べることができなくなったために、保護者の負担も増えました。

電話やメールで、関わっている子どもたちの状況確認をし、学習支援を教材郵送やオンラインに切り替え、各家庭のネット環境の整備、そして逼迫する家計を支えるための緊急物資支援等に追われました。

今回のコロナ禍は、大人の抱える不安と子どもの抱える不安の違いが見えた出来事でもありました。そして、状況に対する子どもたちの順応性に改めて気づかされた時期でもありました。

感染防止に追われる大人。

家計や家事の負担に追われイライラする大人。

そんな大人を心配する子ども。

休校措置により不登校がクローズアップされず安心する子ども。

オンラインによる学習支援の様子

みんながマスクを付けるようになり、日常的にマスクを付けていることを特別視されず安心する子ども。

会えないならオンラインで遊べばいい、と気持ちを切り替えて、今出来ることを探して楽しむことのできる子ども。

私たちが関わっている子どもたちの中に、コロナ禍で大人が判断し決定した様々な生活の制限について、ずっと不満を言っている子どもは一人もおらず、ただ、状況や判断を受け入れて過ごしていました。

子どもは状況に順応し、今出来ることに素直に向き合っています。一方で、子どもの順応性は、子どもたちの発信する力の弱さなのかもしれません。あらゆる状況を打破していくために、自分たちで考えて行動することの脆弱性。危機的な状況になればなるほど、人は自分のことで精一杯になります。そんな時こそ、自分のことを自分で守るために、自分のことをどう発信していく必要があるのか、誰にどのように助けを求めることが大切なのか、今一度子どもたちと考えていきたいと思います。

「みんなには、その権利があるんだよ」ということを丁寧に子どもたちに伝え続けていく必要性を感じています。

きっと、もうひと踏ん張りです。この状況下で頑張り続けてくれている全ての方に感謝しながら、子どもたちと一日一日を大切に生きていきたいです。